

6 おわりに

西方からでは最も早くユーラシア大陸を横断したカルピニ、その書はマルコにも優るとユールも賞賛したルブルク、ラムージョにも収められたハイトン、マルコに続いたオドリクス、イスラムだが旅のスケールと内容の詳細でマルコに優るバットウータ、あるいは東方からだど、チンギス・カンに招かれた道士長春真人、イル・カン国アルグンに用いられたネストリウス教司祭パール・サウマ、彼らはいずれもほぼマルコと同じ時代、十三世紀半ばから十四世紀にかけて、モンゴル帝国の成立により東西両世界が初めて直接的接触を持った時代に属し¹⁾、共に優れた旅行記を残しながら、後世の評価においてまた何よりも知名度においてマルコに遠く及ばない。このヴェネツィア商人の旅と書が彼らのどれにも劣るものではないことは誰しも認めるところであるが、それにしてもその差は甚だしい。言うまでもないことながらこれは、彼らがそれぞれ共に立派ではあるが一人の旅人にすぎなかったのに対して、マルコ・ポーロは、彼らを代表しかつ時代と国を越えた象徴と化しているからである。子供向けの'世界偉人伝'にも名を列ねる一人であることからそれが分かる。唯一比肩しうる者があるとすれば、やはり象徴と化したコロンブスであろうか。²⁾

しかし、なぜ'偉人'なのか。長途の旅をなし、その手記を残すことがそれほど偉大か。十三、四世紀という時代になされたのなら偉大としよう。では次に、なぜ彼でなければならないのか、ユーラシア大陸を最初に横断した者でも、唯一詳しい旅行記を残した者でもないはずである。その旅と書があらゆる点で他の誰よりも勝れているからだとしよう。最後にでは、誰にとっての偉人なのか。人類全てにとってか、'発見'され'征服'された東方や南方の民にとってもか、それとも発見し征服した西方の民にとってだけか。ともあれ、少なくともヨーロッパ人にとっては偉大であった。そしてその象徴化・偉人化に一役買ったのが、ラムージョのこの「序文」である。実際、上記の誰もこのような伝記あるいは物語を持つという幸運と名誉を手にしなかった。

ラムージョのマルコ・ポーロは、ここ見てきたごとく、その旅の行程、新旧の

地理情報、その書に述べられている出来事、昔からの言い伝えや逸話、そして彼自身が古い記録を調べて発見したいくつかの事実、こうしたものをどうやら想像をたくましくして適当に織り合わせた解説あるいは‘物語’であった。そこに記されている個々の事実は、折りに触れ註に見てきたごとく、今となってはほとんど否定されるか必ずしも信用できない性質のものであることが知られている。もっとも、それが書かれたのは、厳密な文献考証に立った歴史的・批判的方法のいまだ確立されぬ時代であり、学者・教養人のみならず一般読者をも対象とする商業的目的をも兼ね備えた出版においてだったという事情も考慮されなければならない。それでもなお、そうした細部の誤りや不正確にもかかわらず今なおあらゆる伝記や紹介書に用いられ、また一つの伝記として魅力を保っていることには変わりない。これは、始めに述べたごとく、比較的近い生の声を伝える唯一の本格的資料であることとともに、真偽は別としてその旅と生涯を面白く描いて読者を愉しませる‘物語’であることによるのは言うまでもない。が、はたしてそれだけであろうか。それは、ラムージョの持ち出したマルコ像が、当時のそして後のコーロッパが必要としたものにぴったり合うものだったからではなかろうか。つまりラムージョがそれを世に問うた時代とその後の歴史というものが大きく関わっているのではあるまいか。

始めに、ラムージョはあるゆる点でマルコ・ポーロ研究の出発点となったと述べた。ルートの確定、地名の比定、記述内容の総合的な解説、古記録に則った伝記研究、数種のテキストの対校と原典批評、等々である。もう一つそれに劣らず注目すべきは、このマルコの偉大化すなわち‘マルコ・ポーロ神話’の出発点となっていることである。そして我々の関心もそこ、すなわちもはや伝記的事実ではなく、その評価の転換と新しいマルコ・ポーロ像、つまりポーロがどのように持ち出されているか、そしてそれがその後どのように受け継がれ、どのような役割を果たしてきたかという点にある。昔、マルコの書は事実を述べたものとは考えられず、「信じ難い驚くべきことども」を語る「驚異の物語」として、アレクサンデル説話や空想異界譚と同じように受けとめられたこと、著者が「ほら吹きマルコ」とはやされ、「ミッリオーニ」なるあだ名にはそうしたニュアンスが込められる場合もあったことなどは夙に知られる。ラムージョの「序文」も、その間の事情をよく伝えている。その書は、「何十年にもわたってお伽話と見做され、そこに出て

くるや地方の名もことごとく何の根拠もない作り事か空想、つまりいはば夢と考えられてきた」のであると。

「ところが」である、時代は新たな転回を見せた。当代のポルトガル人の航海によって東方にかの著者が呼んだのと同じ名前をもったインディアの都市と地方、それに島々が沢山発見され始めたのである。すなわち東方の「発見」は、「ヴェネツィアの誉れ高き貴人、偉大なるマルコ・ポーロによってはば三百年前にすでに成し遂げられていた」のであった。ここで大切なのは、マルコの発見ではない、それよりも彼らがマルコ・ポーロを再発見したことの方である。すなわち、まさしくその頃大航海とともに始まったばかりの近代ヨーロッパは三百年前に偉大な先達を持っていたことを発見したのである。その世界の発見と征服と同時に、新たな世界像の構築、世界地理と世界歴史の書き替えが始まる。その中心はもはや東の彼方あるという地上楽園でもエルサレムでもなくヨーロッパであり、その主人公はもはや古代のギリシャ・ローマ人でも中世のアラビア人でもなく近代ヨーロッパ人でなければならなかった。その中でマルコは、コロンブスと並んで最も英雄的な位置を占めることになる。かつて全世界であったユーラシア大陸の最初の「発見」者であり、しかもそれが三百年前に遡るのだから。あまつさえ彼は、中世というそれに先立つ自閉的な時代の世界像におけるヨーロッパ人の知識の欠を埋めるものであった。旧大陸をカバーする第二巻の巻頭にその書が置かれのむべなるかなである。すなわち、自らを中心として書き替える世界史のために近代ヨーロッパは、過去の時代に属する英雄つまり一人の先達を必要としていたのだった。現代のためにはコロンブスがいた。

かくて「世界の驚異」は「世界の記述」に、「ほら吹きマルコ」は「偉大なるヴェネツィアの貴人マルコ・ポーロ殿」となり、それまで絶対的な権威であったプトレマイオス、ストラボン、プリニウスすら彼によって訂正されなければならなくなる。ラムージョが『航海と旅行』編纂の目的をそれら新たな発見によって古代の著者たちを訂正すること、すなわち世界を「書き替える」ことにあると述べていたのは前に見た。かくてマルコの書は、アレクサンデルやブレスビテル・ヨーハンネースの伝説に代わって東方のイメージを決定するのみならず、直接に足に踏み手に触れ眼にされた事実を伝える科学の書として新たな権威を獲得する。コロンブスが航海にその一本をガイドとして携えていたのは周知のことであるし、

ラムージョもさっそくその導きのもとにアジアの地理を解説しようとしていた。

もともと、その意図や壮とするべきではあったけれども、その時代にはまだ無理であった。確かな世界地図はまだ望むべくもなく、当時続々ともたらされる新たな情報を分類整理し旧い知識とうまく結び合わせて地球像を正しく確定するのは、この十六世紀前半のヴェネツィア共和国書記官の手にあまった。そこで他に、地図や航海の分野ではそれまでヨーロッパ人の師であったアラビアの書物とそして当時最新の旅行記、ラムージョの場合はアビルファダ・イスマエルとバロスに助けを求めるのだが、それらの書自体が不正確なものであったうえ、新情報はあまりにも多く、世界像の転換はあまりにも根本的であった。つい一昔前まではヴェネツィアの商業圏に属し、その裏庭であったはずの黒海周辺の地理からして早や混乱し、相変わらずアレクサンデルの鉄門や乾いた樹やピソンの川に抛らざるをえなかった。ペルシア以東についてはもはや解説と理解すら放棄してしまっており、中国とインドに至っては、それがかの旅行記の中心をなすにもかかわらず、いくつかの土地の経緯度を除いて言及されることすらない³⁾。著者が謙虚に、「マルコの書の冒頭に関する」と断らざるをえなかったのも、それを自覚してのことであろう。

このルネサンス・ユマニストの筆が躍るのはむしろ、マルコその人について書く時である。そしてその時、その叙述を貫くのはこの新たな同国の英雄の偉大化であり、その旅と生涯のドラマ化である。いわく、三百年の昔、旅の長さ・困難さ・スケールの大きさ、コロンブスとの比較、未開の国タルタリアでの生活、巧みな文章、ヴェネツィア帰還時の情景、ユリシーズの喩え、忘れた母国語、宴会での演出、豪華な衣装、莫大な財宝、その隠し方、市民の尊敬、「ミッリオーニ」の謂れ、クルツォラ海戦での活躍、名誉の負傷、捕虜の屈辱、ジェノヴァ市民の歓迎と尊敬、旅行談の評判とジェノヴァ貴人の協力、ラテン語での著述、その書の大成功、家族の心配、解放後の結婚、立派な墓と家紋、高貴な家系、その輝かしい末裔たち、云々。必ずしも誉れ高かりしとは言えぬかつての伝説に替って、新たな輝かしい伝説の基礎はかくて揺るぎなく据えられたのであった。

この“マルコ・ポーロ神話”、生前は不遇だった十三世紀末から十四世紀にかけての一商人の偉人化は、ラムージョの語る個々の事実には批判を加えこれを訂正しながらも、その精神と位置付けはその後にも基本的に受け継がれ⁴⁾、その時々

論者の立場から、例えばラムージョのようにコロンブスに対するヴェネツィアの英雄として、ベデットのように祖国イタリアの偉人、そしてユールを始めとしてほとんどすべての研究者に見られるごとく、ヨーロッパ近代の偉大な先達、探検家・地理学者・科学者はては文学者・思想家としてますます高く持ち上げられることになる⁵⁾。そして、かくて書き替えられた歴史においては、マルコはあたかもその偉業を独り成し遂げたかのごとく見做され、その人と書は最初から認められたかのごとく扱われ、十六世紀半ばラムージョがなお頼らざるをえなかったアラブの書と学は忘れ去られてゆく。こうしたマルコ・ポーロの持ち出し方の系譜については、すでに前稿でも若干見てきたし、今後もおいおいたどって行くこととして、今回は最後に、近年最高の研究者として知られるベネデットの、今日なおその系譜の末端に位置する色濃いマルコ・ポーロ論と像を紹介するに止める⁶⁾。

【註(1-6)】

1) それぞれの生没年と旅の時期(カッコ内)は大略次のごとくである。プラノ・カルピニ: ca.1182-1252 (1245-47)。ギョーム・ド・ルブルク: ca.1220-90 (1253-55)。ハイトン: 小アルメニア王ヘトゥム1世(1201-71)の東方行は1254-55、その甥ハイトンの『東方史の華』は1307年。オドリーコ・ダ・ポルデノーネ: ca.1265-1331 (1314-30)。イブン・バットウータ: 1304-77 (1325-50)。長春真人(丘処機): 1148-1227 (1220-24)。バール・サウマ: ca. 1224-? (1275-88)。

2) 3-12 参照。

3) もっとも、地理に対するこうした一種の不案内は、始めにも述べたごとく、大陸別ではなく海洋ルートを基本とするその地球観からくることも大いにあると考えられる。海洋国家ヴェネツィアの市民らしく、アフリカでもアジアでももっぱら海岸地域に言及し、内陸部にはあまり興味を示していない。

4) ラムージョについてはどの研究者も触れており、近代的研究の始まりであること、その伝記は事実の裏付を欠き伝説や空想によっていること、しかし何かしら今なお生命と権威を保ち、「本質的要素を含む」(Yule p. 2) と見る点でほとんどが共通する。唯一厳しく非難するのがベネデットで、滑稽な伝説に基づくその伝記は偉大なマルコ・ポーロ像を貶しめる体のものであり、とりわけ帰還後のエピソードについては、「抜け目なく逞しい一人の商人であり、全く喜劇的な場面の英雄である。そこからは、希有な人物に払って然るべき賛嘆と尊敬の念はまず

もって起こらない」(Benedetto p. 81)。

5) 最も高く評価するのはやはりユールで、その地理上の発見の数々を見れば、「その偉大さを誇張したり、空想して何かを付け加える必要はさらさらない」(p. 107)。近年では最も実証的な研究を発表したガッロですら、マルコの評価・位置付けとなると、「マルコ・ポーロの結論的判断」として、その書は単に商人による商人のためのものではなく、「はるかそれ以上の何か」としたうえで、シアリニョンの次の文(1924)を引いてその論文を結んでいる:「近代地理学を打ち建てたことにより、誠に以て祖国ヴェネツィアの誉れにして西洋の栄光である……。何世紀後かには、その名はホメロス、ヘロドトス、孔子その他人類の偉大な恩人たちのそれに列ねられるであろう」(Gallo, 1954, p. 154)。こうした偉大化の流れ、とりわけマルコの商人性を否定する説(特にオルシュキ)を批判し、“商人マルコ”の視点からその書を分析し、その成立の経緯に新たな説(註3-42参照)を提起したのが Borlandi であった。

6) 本書Ⅲベネデット「序」。



図1 ラムージョ像(2)